

視線はまんべんなく

暮れのあいさつに部下と二人で顧客を訪ねた。快く応接室に通されたのは良いが、会談中、先方は当方の部下にしか視線を向けない。気心知れた担当同士なので、話しやすく、ついつい目がいつてしまふのだらう。ただ我が心境はというと「なんだかないがしろにされてしまった」と置いてきぼりをくった感じだ。

これはときどき出くわすケース。ビジネスマナー上、訪問客が何人か連れ立ってきたときは、その中の上位者を尊重し、全会話の八割は上位者に視線を置いて話さなければならぬ。

誰を見るかは話しているときだけではなく、会話を聞いているときもとても重要だ。声が耳に入り、話の内容はしっかり聞いているにしても、視線が向いていないと相手は話に身が入りにくいし、納得できない。視線は気持ちを伝える大切な役割を負っている。

忘年会や食事会などの雑談で上下関係がない場合でも、特定の一人だけを見て話すのはマナー違反。ほかの同席者は蚊帳の外でしらけてしまふ。なるべくまんべんなく視線を移し、みんなをひとつの輪に入れる配慮を忘れないで。

② 会話を盛り上げる

(コミュニケーションスクール主宰 今井 登茂子)